

S. ツヴァイクに見るヨーロッパ的 教養の限界

古 賀 保 夫

I

シュテファン・ツヴァイク Stefan Zweig (1881. 11. 28~1942. 2. 23) の「昨日の世界」Die Welt von Gestern は彼の死に先立つこと約2年前の1941~2年にかけて書かれた自叙伝である。一読すれば同書にはヨーロッパの半世紀に亘る推移が反映され、またその変転する世界の中で揺れ動いた代表的知識人の生涯と最後に自虚的な自殺を遂げた人間に見る19世紀ヨーロッパ教養の限界が感じられる。伝記、小説詩、随筆、ドラマ、さらに翻訳など多方面な領域に行くとして可ならざるなきものの如く生涯約20万枚の原稿を書き綴った Zweig の作品のうちから、いま「昨日の世界」だけを取り上げて表題のような内容を語るのは、いささか浅薄の感もあるが、それでもこの自伝にヨーロッパの歴史50年の回転と、その回転速度に巻き込まれ締めつけられた大教養人の精神状況がうかがわれるために、この一冊を軸として論をすすめることにした。

Zweig は同書の「はしがき」で自己を「オーストリア人、ユダヤ人、ヒューマニスト、平和主義者」と規定しているが、同時に自己の優越性を覗わせる文を書いている。たとえば「強大なハプブルグ君主国に生まれ……国家を超えたウィーンに育った」ことを「ただ一つの優位点地位である」としている。このことは同時に育った場所、空間がすでに「昨日の世界」となり過去に押し流され埋没しても、なおその優位的地位に恋々とし、その後続く「今日の世界」「明日の世界」には安住できない心境に陥ることは否定できない。Zweig にあっては昨日の世界と今日の世界が画然と区別されている。未来につながる歴史の連続性についても、上昇はなく下

降線のみが眼前に去来し、ために終末観が生まれて来ざるを得ない。

さらに Zweig がユダヤ系の富有な繊維工場主の子として家庭的には何不自由なく生活したことが、この心情に決定的な役割を与えていると考えざるを得ない。何不自由ない生活環境こそが彼にとっては「真理」であったのではないか、ということである。というのは「昨日の世界」はヨーロッパの上流階級・中流層とその中に育くまれた自己を述べていることと、その平和な治世以外は異物ではないにしても融合的存在ではないような筆の進め方にも気付かずにはおれないからである。

二度の大戦とそれにはさまれた年月。その時代の歩みの中で Zweig は「大きな大衆のイデオロギーが拡がるのを見……人類が想像もつかぬところに墮ちて行くのを見る」とした人間の墮落傾向の速度化のみをなげているところにも同じ傾向が覗い知られる。大衆は自分とは全く別な存在として映っていたのではないだろうか。彼には大衆一労働という観念は全然なかったとまで決めつけないまでも、稀薄だったとしか思えない。彼の眼は自己の安定を取り巻く世界以上には出ていないのではないか。それに重視しているのに「内面の自由」の問題がある。内面の自由こそが望みたいものだとしているけれどもその自由に浸れる場におれるのは本人自からが得た結果なのでなく、いわば初めから与えられていたものである。その点が看過されている。つまり gute Familieこそが彼の安住の場だった。「人類は向上してく信仰を否定できぬ」（「安定の世界」）と言いながら、その過程に変革は不要であるとするのに似ている。自己の属する世界は聖域でありたい、という願望がこびりついているようだ。

Zweig はユダヤ人であるが故に ヒトラーから迫害された。ヒトラーに見る人種差別は許さるべしもないが、ナチスに塗炭の苦しみを味わされたユダヤ人について Zweig は「ユダヤ民族は選民」として把握している。彼はユダヤ人をつぎのように定義づけている。

Im allgemeinen wird angenommen, reich zu werden sei das eigentliche und typische Lebensziel eines jüdischen Menschen. Nichts ist falscher. Reich zu werden bedeutet für ihn nur eine Zwischenstufe, ein Mittel

zum wahren Zweck und keineswegs das innere Ziel. Der eigentliche Wille Juden, sein immanentes Ideal ist der Aufstieg ins Geistige, in eine höhere kulturelle Schicht. Schon im östlichen orthodoxen Judentum, wo sich die Schwächen ebenso wie die Vorzüge der ganzen Rasse intensiver abzeichnen, findet diese Suprematie des Willens zum Geistigen über das bloß Materielle plastischen Ausdruck: der Fromme, der Bibelgelehrte, gilt tausendmal mehr innerhalb der Gemeinde als der Reiche; selbst der Vermögendste wird seine Tochter lieber einem Kaufmann. Diese Überordnung des Geistigen geht bei den Juden einheitlich durch alle Stände; (S. 21. Die Welt der Sicherheit)

ユダヤ人にとっては金儲けは第一目標ではない。それよりも社会の上部構造に位置づけされる人間の文化活動を追及する人間である——とも理解できる。さらに「ウィーンでは軍事、政治、商業は優位を占めていない」と付言している。ウィーンにおける優位尊敬に値する人間は芸術家である、との人間価値観に立ち、それを目途としているのがユダヤ人である、と見ている。文化担当の層としての自負心がのぞいている。それはそれなりの現実社会の相の照射であるが、これが *Zweig* にあっては良家—知識人—自己といった自己優位認識観念の露呈ではないかと考えられてくる。これは自由の領域を優位者だけに限定し、張り廻し、自由所有の不均等につながり易い。それにウィーン文化は「十中九までユダヤ人で養われた」(安定の世界)とのウィーン観・ユダヤ人観を述べている。ウィーンの実相はそうであったとしても、その認識過程はその大衆観と重ね合わせるとき、この秩序づけられた世界、落ちついた世界の住人の困いを出ていないとしか考えられない。彼は青年時代までその時代の良さを愉楽していたのである。「ヨーロッパの中で安全無事に目からを置く国家オーストリア」との国家観に立脚している。その国家はハプスブルグ帝国の支配下のそれである。だがハプスブルグ帝国は支配者オーストリア人とハンガリー人のほか少数民族のチェッコ人、ルーマニア人、スロヴァーク人、ポーランド人、セルヴィア人などの被支配民族で構成されていた。この被支配民族は彼の眼中には映っていないかの如くである。その自己を *Humanist* と自

称している。このとき大衆、被支配者とは無縁の人間が眼前に浮上する。

これと無関係ではないのに **Zweig** のプロレタリア観がある。ギムナジウム時代に「プロレタリアへの転落という最悪の感嚇」(前世紀の学校)と決めつけている一句がそれである。ここではただ自分の芸術への道が容易に拡がっていた小市民的な生活人たる **Zweig** の姿が日立つ。百万長者の継承者である人間 **Zweig** の生活を可能にした経済的基盤には余り深く立ち入ってはいない。かくて自己の生活に波を立てる諸条件は否定さるべきこととなる。そうした眼前の豊かさを楽しむ **Zweig** は文化関係の人との交際が織りなす生活を続ける。シュニツラー、ヴァレリー、ホフマンシュタール、リルケ、ヘッセ、カロッサ、コルベンハイヤー、さらに齡を重ねるにつれてロマン・ロラン、トーマス・マン、ヴェルフェル、ブランデス、シュトラウス、ジュール・ロマン、ジッド、マルタン・デュ・ガール、ゴルキー、ジャーメルなどとその外延はますます拡がりを見せてくる。

II

だが **Wien** も一皮むけば欲望と頹廢の町である。これについて **Zweig** は「愛の市として許された横町」「良家における女中の役割」(春の目覚め)があるのを知っている。だが本人はそうした裏の実態とは全く無関係であったのか、自分との係わり合いには何一つ触れてはいない。この自伝で見る限りあく迄も身ぎれいな人間として青春時代を送っている。果たしてそうであったのか——という疑問が、彼の学生時代の交友の多彩な深交から生じてくる。赤裸々に綴られた自伝なのか、と首をかしげたくなくなる。これに比べると同じ回想記にしてもルソー **J. J. Rousseau** (1712~1778) の「告白」**Confessions**の方が人間の内面暴露に至っており、まだまだ「人間」に迫るものがある。よしんば身ぎれいであったとしても **Zweig** は庶民の中に入って行く気がない人間としか思えない。上品さを身上とする人間像がちらついてくる。天上の美しさを心に画き、それと調和を奏でる。そこに人間、歴史的な人間、具体的な人間への道程は途切れてくる。従って人間を媒体とした世の中の全現象とか秩序をリアルに映し

出そうといった気迫にやや欠けてくるのは止むを得ない。その主体は旧来の秩序における自我以上に出るのは困難になってくる。

とはいえ彼の文章は無駄のない、美しい響きを感じさせる行間を持つ。つぎつぎと生存する現象、心理を鮮やかな手さばきでもって綴り人心に訴えかけてくる、その才能には驚ろかざるを得ない。第一次大戦後のドイツを襲ったインフレの描写など確かな手応えで筆を進めている。読み易い。理解し易く、冗舌さもない。見事な才である。だが何か物足りない。低俗ではないが通俗作家を思わせる。それは自己と他とを含めた自我が拡大し得ないのに原因があるのではないかと思われてくる。自分と環境を異にした人間とは断絶したままですごした自我しかないからではないか。これが彼の教養の幅ではなかったか、という念が湧いてくる。だから世の中を描くにしても、よしそれは美しい文章であっても、それだけで世界の真実を捉えているとは断じ切れない。この上品さの故もあって彼はドイツ人学生の乱痴気騒ぎには本能的な反発を持つ。もちろんそれは理解でき得る反発心である。とくに嵐の如き学生の飲酒放歌と、それに酔う学生の利害意識を見抜いている眼力はさすがながらそのドイツ男性精神を見下す眼は、同時に大衆を見下す眼と同質ではないかということが問題である、といっても過言ではなからう。ドイツ人学生をつぎのように評している。

bis zum Erbrechen zu saufen, einen schweren Humpen Bier in einem Satz bis zur Nagelprobe (bis zum letzten Tropfen) zu leeren, um so glorreich zu erhärten, daß er kein 'schlapper Bursche' sei, oder Studentenlieder im Chor zu brüllen und im Gänsemarsch nachts durch die Straßen randalierend die Polizei zu verhöhnen. All das galt als 'männlich', als 'studentisch', als 'deutsch',... (S. 93. universitas vitae)

この場合 Zweig はただ傍観者流である。それは本人は「自分の時間と自由だけが欲しい」と願う人間であることから察しられてくる。彼はまた「アカデミックな作業は敬遠するがさりとて街頭に出るのは避けたい」との心情の所有者なのである。教養あるブルジョア生活者であり、その中に閉じこもっている。これでは才能に恵まれていても旧来の習から脱して

全部の者と輪を組み進む人間とは不縁なのではないか。世界観と対決する気構えをもち、自分を鍛え上げることから逃げたいのではないか。その点を簡潔して述べているのが同じ章の次の一文である。

So praktisch, handlich und heilsam der akademische Betrieb für die Durchschnittsbegabung sein mag, so entbehrlich scheint er mir für individuell produktive Naturen, bei denen er sich sogar im Sinn seiner Hemmung auszuwirken vermag.... So wurde das eigentliche Kriterium meiner Wahl nicht, welches Fach mich am meisten innerlich beschäftigen würde, sondern im Gegenteil, welches mich am wenigsten beschweren und mir das Maximum an Zeit und Freiheit für meine eigentliche Leidenschaft verstatten könnte... Gedanken entwickeln sich bei mir ausnahmslos an Gegenständen, Geheimnissen und Gestalten, alles rein Theoretische und Metaphysische bleibt mir unlernbar. (S. 96.)

Ⅲ

長じて Zweig はパリで学ぶ。そのパリーを彼はベルリンとの対照でつぎのように心に受けとめる。

.. wer kümmerte sich in Paris um solche später erst aufgeblasene Popanze wie Rasse, Klasse und Herkunft? Man ging, man sprach, man schlief mit dem oder der, die einem gefielen, und kümmerte sich sieben Teufel um die andern. Ach, man mußte zuvor Berlin gakennt haben, um Paris recht zu lieben, mußte die freiwillige Servilität Deutschlands mit seinem kantigen und schmerzhaft scharf zugeschlifenen Standesbewußtsein erlebt haben, wo die Offiziersfrau nicht mit der Lehrersfrau und diese nicht mit der Kaufmannsdame und diese schon gar nicht mit der Arbeiterfrau 'verkehrte'. In Paris aber ging das Vermächtnis der Revolution noch lebendig im Blute um; (S. 124. Paris, Die Stadt der ewigen Jugend)

Popanz, Rasse, Klasse, Herkunft, Servilität といった言葉にベルリンの頑固な保守性を含ませ、Blut, Revolution にパリの自由性を並置させて、両都市を対照させている。人間的同志の間の壁を取り払ったパリと鋭く磨かれた階級意識の強いベルリン。前者における市民感覚の浸透

と後者における屈従性を引き出して革命の遺産と、そうでない都市との差を感じている。しかし、ここでもその「差」だけが眼中にある。そのころベルリンはようやくプロイセン帝国から独占資本主義社会体制への移行過程にあった。この進行を見すごして、ただパリとベルリンを比較対置しているような文面であり、このためパリの中に置いた身も上流家庭意識のままであったろうと推測される。そこに己変革につながるモメントとなすべきものはなかった。その一証として彼の心情を語る個所がある。それは「私を引きつけるのは運命に打ちひしがれたもの」という言葉である。この打ちひしがれたものは、かつての良き家庭の人々と悪との対決をせず、権力に流されて落ちて行く人間のことを指していると考察される。大衆を断絶の向う岸に見る波には「運命に打ちひしがれもの」は、このような型の人間ではないかと類推されてくるのである。こうした世界では運命をただ甘愛するもののほかない。

次の一文――

In minen Novellen ist es immer der dem Schicksal Unterliegende, der mich anzieht, in den Biographien die Gestalt eines, der nicht im realen Raume des Erfolgs, sondern einzig im moralischen Sinne recht behält, Erasmus und nicht Ruther, Maria Stuart und nicht Elisabeth, Gastellio und nicht Calvin; (S. 159. Umweg auf dem Wege zu mir selbst)

におけるように成功と呼ばれる場よりも道徳的意味での正しさを持つ人間に共感をもっている。けれどもそれは一方では闘わざる人間なのではないか。生の根源を追及するにしても主体の心情の動きから観相しやすくなってくる。

これと相似て「人類の星の時間」*Sternstunden der Menschheit* (1928) に登場させた人物論でも、その人間の行動の基本を偶然においている点が強い。ここに人間の生涯で不可避的なものとしての運命観がある。必然との結びつきを無視した偶然の問題となる以上、この運命感は無虚につなざるを得なくなる。その運命が人間の「個」を崩す力を持つときも、結局は「止むを得なかった」と諦念するほかない。これでは他我と自我の

連帯が消えて行く。身分的差別感情に浸っている限り、自己と他者との連帯は偶然に委せられてしまう。社会性はうすれ、近代的自我は他者を含まないまでに置かれる。自己と社会とを結ぶ契機を見失っている以上「私」「他」の追及、人間の社会性の欠落し個人は自己の殻に閉じこもってくる。ここに Zweig に見るヨーロッパ自我の限界が考察されてくる。

この運命観の下では、たとえばヒトラーナチスの暴虐に対しても、憎悪だけがあって、抵抗への道がない。粗野な新興勢力に対抗して抵抗を進めることなどあっさり諦めるほかない。これもウィーンにおける「秩序」ここ永却に続いて欲しいと望むのと同じ発想からの当然の帰結ではないだろうか。

もとよりこの伝記を読めば Zweig は独裁者ヒトラーの本心を明確に見抜いている(ヨーロッパを超えて)(ヒトラーここに始まる)。ただし、この狂人的人間ヒトラーの野心を捕えねばならぬことだと恐れながらも、その肝心の点になれば、それは自分とは別な人間が防止するものと「信ずる」だけなのである。その当時のことについては――

Wir vertrauten auf Jaurès, auf die sozialistische Internationale, wir glaubten, die Eisenbahner würden eher die Schienen sprengen als ihre Kameraden als Schlachtvieh an die Front verladen lassen, wir zählten auf die Frauen, die ihre Kinder, ihre Gatten dem Moloch verweigern würden, wir waren überzeugt, daß die geistige, die moralische Kraft Europas sich triumphierend bekunden würde im letzten kritischen Augenblick. Unser gemeinsamer Idealismus, unser im Frontschritt bedingter Optimismus ließ uns die gemeinsame Gefahr verkennen und verachten. (S. 185. ♪)

はじめは楽観していた彼のオプティミズムが裏切られるのは、ただ他者の力で勝つと信じていたからである。その結果「われらに欠けていたのは……組織者であった」(ヨーロッパの光輝と影)との述懐となってくる。これはおそらく本心であろう。信ずるか否かということ、これは人間が思愛の中だけで手をつなぐときの連帯感であり、この連帯感は所詮は小さいものであることを示している。こうした回避的心情は第一次大戦の場合の

態度にも現われている。始めのころ「戦争を憎むヒューマニストで平和主義者」であった **Zweig** はスイスのベルリンで **Rotes Kreuz** 「赤十字」の仕事に従い、彼我の別を超えた行動に挺身しようとしており、ために「彼の態度は売国的だ」とまで攻撃されるような文筆による人道主義立場をとるが、しかし一方、しばらくの間だが **Wiener Kriegsarchiv** (ウィーン戦事記録所) に勤めている。この生活を綴った文章からは兵役忌避を目途とした勤務であると見受けられる個所が目につくのである。徹底した反戦でなく、むしろ厭戦である。つぎの一文がこれを物語っている。

Meine natürliche Haltung in allen gefährlichen Situationen ist immer die ausweichende gewesen, und nicht bei diesem einen Anlaß mußte ich villeicht mit Recht den Anwurf der... (S. 212. Die ersten Stunden des Kreiges von 1914)

ヒトラーナチスの下で **Th. マン** が戦闘的ヒューマニストであったのに比べると **Zweig** は「今日の世界」には諦めを懐き「明日の世界」への展望を持たず「昨日の世界」に顔を向けている人物である。敗北感が濃くなる他ない。この点、賢明な **Zweig** は自からそれを感じてはいる。そうしてただ心を安定させているのは精神的優越意識だけであるが、この優越感 は彼の置かれている不自由のない人生経験者、またはそれのみを世界を観ずる人間に見るそれではないかという問題が生ずる。

Von meinem ersten Stücke, 'Thersites' an hatte mich das Problem der seelichen Superiorität des Besiegten immer wieder von neuem beschäftigt. Immer lockte es mich, die innere Verhärtung zu zeigen, die jede Form der Macht in einem Menschen bewirkt, die seeliche Erstarrung, die bei ganzen Völkern jeder Sieg bedingt, und ihr die aufwühlende, die Seele schmerzhaft und furchtbar durchpflügende Macht der Niederlage entgegenzustellen... (S. 233. Der Kampf um die geistige Brüderschaft)

またつねに「政治に引きずられたくない」という力が心に強く残っている。彼の筆致は鮮やかであり人心を打つ。教養人としてのペンの運びは読む人の心をいつしか没入させる点で一流である。それでもなおかつ文脈の

裏に弱さを感じず。純粹的ではあるが生命力を喪いつつある脆さである。文は人なりという。こうした文面、これは「死」の病にといつかれた心の表出であろうかとも思われてくる。

第一次大戦後の国内の動揺、救世者然としたヒトラー、ナチスの黒幕的存在の財界人と軍部、ヒトラーの権力掌握への手順と組織者として人の利点を巧みに取り入れる手腕、そして野蛮、第二次大戦への進展、これらの一連の動きを流れるような運びの筆で説明しているが、そのヨーロッパにあって Zweig は身も細る思いと、ナチスへの憎悪で日を過ごし、そしてドイツ的教養の犯罪性を指摘している。鋭い心理指写で人物を紙面に躍らせている。しかしこの嵐の中で Zweig の教養の内容は何であったらうか、という点に思い至るとき、それは消費都市ウィーンでの生活の場を楽しむ人間の姿がくっきりと浮かんでくる。彼は若くして名声を持った。当然のことながら出版物により印税は送られてくる。「有名にならぬとき、肩書のない人間が本物の人間だ」と言いつつも、自己の名声には得意になっている姿さえ書かれている。人生を一気にかけ上った彼は、いわば人生を素早く理解する人間であったのであろう。賢明さが先に立ちすぎる姿がこの自伝の中で目立って仕方がない。

ヒトラーを軽蔑する Zweig の眼は鋭い。ヒトラー政治は反ユダヤ主義、超国家主義であり、ユダヤ人に対するゼノサイドである。建設的なものはない。だから政治的緊張を再生産するのがナチスの生存条件となっている。このナチスに対し Zweig は「ヨーロッパ的に考えるだけでなく、ヨーロッパを超えて考えねばならぬ」(平和の苦悶)と言う。その一方では没落に向う *Bürgertum* への郷愁が根強い。そこに斜陽の歌が歌われてくる。それは美しさを歌い上げるというよりも歌い納める方に向っている美文である。ウィーンに咲いた花を後ろ向きに眺め綴っている。この凋落するウィーンについては「この国—かつてヨーロッパを支配していた—そこは……壁の中の石であった」(同)と讚美する。だがいかに美しいものを感じても悪に立ち向う強さは感じられない。ユダヤ人として迫害され、資金も凍結された身を思えば弱気になるのもまた当然だと同感できるし、ナ

チスの横暴に対し怒りを憶えるものの、対応の仕方はウィーンの消費的な Bürgertum 意識からの発想ではなかろうか。

IV

Zweig は 58歳にして第二次大戦のさ中に欧州を去り、1934年英国へ1940年アメリカに渡り、ついでブラジルに行く。このときは長年に亘り執筆などについて彼に尽した妻と別れ女秘書ロッテを同行し結婚している。この間、S. フロイト（1856～1940）との会見がある。精神分析者フロイトの影響は Zweig が人間の感情を分析するときに大きく手助けをしている。心層理分析に、このフロイトの方法をメスとして用いて、科学的方法と芸術的感性の調和を生んでいる。その Zweig が亡命の途上にあって考えていることは「60歳に近くもなって時に逆って反抗するな！」というのであった。

亡命、孤立。これが Zweig の身をさいなむ。若き妻との生活。ここで「自分は自分に忠言であり、本当に生きた」ことを思う。「昨日の世界」の最後をしめくくっている文――

Aber jeder Schatten ist im letzten doch aus Kind des Lichts, und nur wer Helles und Dunkeles, Krieg und Frieden, Aufstieg und Niedergang erfahren, nur der hat wahrhaft gelebt. (S. 395.)

ここに「自己に忠実であった」と自問自答した形の Zweig が実はその限界点を見せている。亡命が思想的、戦闘的、抵抗的形態をとらず、自己諦念、放棄に近い姿と変っているのは自己の思想が敗北の色濃いということではないだろうか。彼がロッテとともに自殺に至る心はこれから推せばコスモポリタンの自由主義者の敗北ではなかつただろうか。

(註) 同じくヒトラードイツを憎んだブレヒト B. Brecht は反ナチ主義者として攻撃的であり、反ファシズムに役立つ文学活動を続けた。Zweig はこれに比べると自からの存在を自己の内部に押し込んでしまう。これは亡命を思想的な決断として受けとめるかどうかの差であり、その結果が二人の作家の最後に如実に示されていると思う。

これが端的に示されたものに **Zweig** の亡命生活がある。彼は亡命によって「昨日の世界」から完全に訣別したといえよう。すでにこれより先、ナチ政治の台頭の時点でも「昨日の世界」から脱出していたのだが、はっきり形をとったのは亡命であった。才能にはあふれるほど恵まれていたが、これまで彼を保護してくれた国家、家族は最早やない。それに耐えるには彼は余りにも旧秩序の中の人間でしかなかった。彼は常にオーストリア帝国の偉大さを語っている。そして現実支配秩序のシンボルであった皇帝に対する彼の感情はこれに劣らないほどだったと思われる。その感情が旧帝国を善とすることから生じていたとすれば、すでに第一次大戦後には彼の敗北、挫折感も明瞭であった。その挫折から起き上がる気力は「昨日の世界」の住人には欠けていたとしか考えられない。ましてパスポートのない亡命者となった身には過去を見て暮すだけの人間には耐え切れず、人生途上で解決不能を負って行くという人生観から暗い雰囲気にも吞まれてしまった。亡命者の苦痛は亡命経験のない人間には理解を絶した苦痛があるだろうが、この時の亡命者は **Zweig** だけではなかった。他に自殺者も他に出ている。だが **Zweig** の自殺はただ生活に疲れたという面が濃すぎる。しかも亡命先での生活は他の亡命者より恵まれていたとさえ思えるのである。結局は豊かな上流生活者の教養人であったのが、自からを悲痛の淵に押し進めたとしか思えない。

(註) 「……全体的に見ると、移民作家たちは、アメリカではよい業績をあげなかった。……うち3冊は Th. マン、あとは E. M. レマルク、F. ヴェルフェル、S. ツヴァイクが各々1冊ずつ入っており、彼らは皆アメリカへくる以前からブック、クラブの作家であった。」(「亡命の現代史」——20世紀の民族移動第2巻 出版界—57頁 みすず書房)

「相当数の難民がアメリカ到着と同時に大きな困難にぶつかった。束縛と圧迫のもとでの生活、祖国と家族を急に失ったこと、国から国へと順応してゆくのに疲れ果て、彼らの肉体と精神の抵抗力は次第に弱まってしまっていた。多くの難民は、自分の時間をすべて「生活を創造する」ことに費やし、アメリカに到着した後でさえ「生活を創造」しつづけるという問題に直面した人びとも少数ながらあったのである。当然悲劇が予想された。……E. トラー、K. ドンカー、そして S. ツヴァイクは1942年(ブラジルで)自殺を遂げた。(同 第1巻 第1章 一偉大なる波—8頁)

V

その打ちひしがれそうになった心境を物語っているのに手紙がある。ケステン H. Kesten 宛てのもので、Zweig が英国から1940年1月24日発言したのにはこう書いてある。

...

Wir haben in diesem letzten Jahr nicht nur Freunde verloren, sondern auch den Glauben an die Menschheit—ich habe in einem kürzlich publizierten Buch den schönen Satz gelesen: „Das neunzehnte Jahrhundert war verzweifelt, weil es nicht mehr an Gott glauben konnte. Unser Jahrhundert, weil es nicht mehr an den Menschen glauben kann.“

....

また1940年12月13日リオデジャネイロ発信には

.....

Was ich Sie heute bitten wollte, lieber Freund, wäre, mir einmal kleine Anhaltspunkte zu geben, wie es die anderen Kollegen, die jetzt in New York geschlossen beisammen sind, Mann, Werfel, Feuchtwanger und Sie, etc. mit ihren deutschen Büchern halten wollen. — Es wird jetzt gerade in Buenos Aires ein deutscher Buchverlag gegründet, der mir einen positiven Vorschlag über das Brasilienbuch macht und gute Autoren sucht.... Außerdem schiene es mir das Wichtigste, da³ wir uns nun im definitiv letzten Teil der Emigration nicht wie im zersplittern.

続いて翌年と翌々年にもケステン宛の手紙がつぎのように発せられている。

15. Aug. 1941

Lieber Kesten, wir gehen heute wieder nach Südamerika in unser altes Arbeits- und Lecturebusiness und ich hoffe dann von dort die Einwanderung späterhin zu machen—jetzt habe ich noch fest zu arbeiten und bin (nachdem ich die Autobiographie fast vollendet habe) recht müde.

Petropolis (Brasil), 15. Jan. 1942

.....

..denn die Ausbreitung des Krieges steht, so erfreulich sie für uns vom politischen Standpunkt sein muß, in einer schlimmen Reaktion zur Verbreitungsmöglichkeit unsrer Bücher.

Von mir ist wenig zu berichten. Ich habe eine Novelle geschrieben in meinem beliebt-unglücklichen Format, zu groß für eine Zeitung und ein Magazin, zu klein für ein Buch, zu abstrakt für das große Publikum, zu abseitig in seinem Thema. ..

—Meine Autobiographie ist längst fertig und fast könnte ich, Pirandello varierend, sagen: „Drei Manuskripte suchen einen guten Übersetzer.“

Von den Freunden höre ich ab und zu. Hier ist mein einziger Umgang zur Zeit der vor dreihundertfünfzig Jahren verstorbene Michel de Montaigne, aber eine leidlich gute Gesellschaft zusammen mit Balzac, Shakespear und ähnlichen alten Kameraden.

これを見れば彼が心の底で疲れ果てているのが垣間見える。そのころの Zweig はモンテニユー Montaigne を研究しようとの意図を懐いていた。これは彼の心が一段と「諦念」の人になろうと志し、苦しみから解脱し世外の人となり隠者となりたいとの心が動いたからではないだろうか。ナチスを取扱った彼の小説としては僅か Schachnovelle「将棋小説」に見られるが、ナチスの暴風の前に絶望感が真黒になって心の奥まで被っていたのであろう。そして繊細な心は世の荒波に粟粒のようにのまれ、そこに、一つの悟りを無理にでも得たかったのであろうか。自然を楽しむ人生、隠栖、そうした心境を掴みゝなすべき事は終わったと自分に言い聞かせ、一切の懐観をすてて残生を送りたい——「余生」を過したいと願ったであらう。それが文面にしみ込んでいるようである。自己に沈潜して一人だけの安住の地を望むといった心境。それが美的には理想的であるとしても現実には負の作用をもたらす。文面は Zweig の運命を暗示さえしている。亡命地といっても Brasil では彼の自殺後、国葬で霊をとむらっているほどで、相当の礼をもって接していたのであろう。それでもなおかつ昔のよき時代の自分が忘れ切れなかった。このためにかえって彼は主体としての自

己を喪失せざるを得なくなったのだろう。空虚感が心一杯に拮がりしまったあと自殺決行にと進んだのであろうか。

(註) K. トッホルスキー, K. マン, E. ヴァイス, E. トラーなどの亡命者の自殺も空虚感に充満されての事といえよう。だがツヴァイクに比べ亡命環境は決して良くはなかったと思われる。

(なお戦争を憎んだアメリカの作家アーネスト・ヘミングウェイは1961年7月2日アイダホの自宅で自殺した(と推定されている)。しかし負傷兵としての体験新聞記者, 30年代の反ファッション作家の途を歩いた彼は生きる残忍さと相対峙し戦った人間を書いたし, 彼自身, 無情な世界に立ち向ってきた。精力的に闘い, 自己回復を目指したあとの死であり, その悲劇的な死自体が, 迫り来る破綻と最後まで戦ったことの証明であったとさえ感じられる, 同じ作家の死ながら Zweig の死とは人に与える印象は違っている。)

さて最後にロート Joseph Roth と Zweig とを関連させてみたい。二人の間に 200 通以上の手紙が交信されている。ところが「昨日の世界」における Zweig の重要な交友関係者に Roth の名は見当らない。無視された形である。それは Zweig が自らを高く誇示する現もれなのだろうか。戦い姿勢を堅持しつつも亡命に破れたロートとは先の育った土壌の点で別世界の人間であったのだろうか。それが交友者の一員からさえ落した原因なのだろうか。ともあれ交友人名に挙げていないのを見ると, そこに上流人のワクに自らを縛って止まない Zweig の弱さを見る思いがする。その点に限って言えば Zweig のヒューマニズムは自己の生活圏を守る Gute Familie だけのものであり, その観念に終始すれば逆に人間を裏切ることもなりかねない Humanismus である。

「昨日の世界」の最終章「平和の苦闘」Die Agonie des Friedensの始めに彼はシェークスピア「ジュリアス・シーザー」から引用した一句を書いている。それは

„The sun of Rome ist set. Our day is gone. Clouds, dews and dangers come; oue deeds are done.“

Shakespeare, Julius Cäsar

この中での「われらの日は去った。……危険が訪れる。行為は終わった」との叫びこそが Zweig の切迫した胸中を伝えていると同時に、新ロマン派文人、昨日の栄華に対する哀惜の念を捨て切れぬ教養人としての限界を伝えてくれるものがあるまい。そこに Zweig の限界に突き当らざるを得ない。ブラジルの Rio de Janeiro で、秘書とともに命を絶ったときの遺書に「自由な意志と澄んだ感覚」 aus freiem Willen und mit klaren Sinnen とある。しかしこの一節こそ生への意欲を失ない感傷家に墮した Zweig 姿を物語るものがあるまい。苦しめられることを恐れてしまった人間。そこに我ままが許された上流社会に育った教養人の精神、自らを灰色に色どらざるを得ないツヴァイク的教養の限界を語る結語と解釈せざるを得ないところであろう。

(註) J. ロートは Zweig と同じユダヤ人作家でパリーに亡命し、そこで自殺に近いアルコール中毒で死んだが、そのロートは「今日、ヒトラーと第三帝国に抗して戦うことをしない詩人は弱々しい非人間であり、詩人として価値のない人間である」(1938年12月 Pariser Tageblatt) と言い放っている。ナチスに対する抵抗態度では Zweig と差がある。

参 考 文 献

- | | |
|--------------------------------------|---------------------|
| H. Kesten : Literatur im Exil | 1964 Kurt Desch Vlg |
| (Brief europäischer Autoren) | 1933~1944) |
| Die deutsche Literatur der Gegenwart | 1971 Reclam Vlg |
| S. Zweig : Die Welt von Gestern | 1968 GBF Vlg |